

秋田増田の内蔵

UCHIGURA in Masuda, Akita

増田細見

読本



Masuda in Akita is one of the snowiest places in Japan. Throughout the town, there are plenty of traditional streets, buildings and “Uchigura” still remaining, reminiscent of the prosperity of olden times.

The “Uchigura” were not places where anyone could come and go as they pleased. Entry was restricted to family members. No-one else could enter.

You couldn't see these “Uchigura” from outside.

Access was for the head of the household, and for younger family members only. Sometimes the neighbors didn't even know there was an “Uchigura” next door. These special structures and facilities have been handed down through the ages to the present day.

These rare and unusual buildings are made of black plaster. There are around 50 “Uchigura” here in this town.

People still live in them, even to this day.

国選定

重要伝統的建造物群保存地区

商人の町として栄えた増田には、明治・大正・昭和の建物が残り、その多くは鞘で覆われた「内蔵」を持っています。増田が特別なのは、それらの家々が今でも日々の生活で使われていること。かつての商人たちの息づかいを感じながら、増田を旅してみませんか？

秋田・増田の内蔵を訪ねる 増田のまちなみ散策マップ



増田まんが美術館

あるときは勇気を、またあるときは夢を、
笑いを、学びを、そして感動を与えてくれるマンガ。
そのすべてがここにある。

① 佐藤養助商店漆蔵資料館 国登録有形文化財
材木や味噌醤油を商いとした江戸時代より8代続いた大地主・小泉五兵衛の旧宅。戊辰戦争においては350両という増田一の御用金を納めている。現在は稲庭うどん店に併設する資料館として公開している。

② 旧勇駒酒造 (旬菜みそ茶屋くらを) 国登録有形文化財
宝暦4年(1754)に石田久兵衛が創業し、昭和6年(1931)に株式会社化、平成15年まで営業。酒樽を模したモルタルの鏝絵はこの建物のシンボルとなっている。

③ 佐藤又六家 (佐藤家住宅) 国指定重要文化財
増田特有の細長い敷地に縦長に家屋を配置した姿を現在に伝えており、増田地区最古の店(見世)蔵が現在も現役で使用されている。最大の特徴は、主屋の中にその店蔵が組み込まれているところにある。

④ 旧村田薬局 市指定文化財
江戸時代中頃から平成まで続いた増田で最古の薬舗。切妻造り平入りの店蔵で、二階は薬品等を保管する倉庫として使用。天井は竿縁天井で廻り縁は洋風の線形が彫られており凝った意匠となっている。

⑤ 佐藤三十郎家 国登録有形文化財
江戸後期までは「増の井」の醸造元であった石田久左衛門がこの地で醸造を行っていたが、秋田市に転居したのち初代佐藤三十郎が居住し現在に至る。内蔵はこの地区では最大級の梁間を誇る大型の座敷蔵である。

⑥ 高橋茶舗 国登録有形文化財
米穀商を営んでいた五十嵐養吉家が建てたことから「五養」の蔵と言われ、戦後になり高橋茶舗の所有となった。土蔵は側面の壁まで黒漆喰で仕上げられている。

⑦ 升川商店 (旧栄助商店) 国登録有形文化財
旧栄助商店は大正4年、初代栄助氏が仙臺屋商店から家屋を譲り受け、荒物商を営んでいた石平商店から独立したのが始まりで、戦前まで荒物商を営んでいた。現在は升川商店として公開している。

⑧ 谷藤家 市指定文化財
主屋は、接客の客間棟と日常の住居棟が、黒漆喰磨仕上げの座敷蔵を挟んで分かれている珍しい形式である。客間棟一階は田の字型の間取りで各部屋とも棹縁天井。欄間等は組子細工によって装飾されている。

⑨ 笹原家 (かふえ宝蔵庵/蔵の宿 宝蔵庵) 国登録有形文化財
明治後期100年超の米蔵はカフェとして営業。隣接する外蔵は1日1組限定の宿になっており、中には座敷が設けられ、入口の掛子塗土扉が付かない珍しい形態の蔵である。

⑩ 旧佐藤與五兵衛家 (まちの駅福蔵) 国登録有形文化財
佐藤與五兵衛家は代々の地主で増田銀行創立時の監査役の一人。大正期に増田勲業社を設立し、セメントなどの建設資材を扱う商いをしていた。現在は、まちの駅福蔵で公開している。

⑪ 旧石田理吉家 市指定文化財
文政2年(1819)に石田久兵衛より分家し、戦前まで酒造業(銘柄 金星)を営んでいた。県内でも珍しい木造三階建住宅。

⑫ 佐藤こんぶ店 国登録有形文化財
大正期から昆布販売業を営んでおり、現在の場所まで営業を始めたのは戦後のこと。内蔵の構造、使用の状況からみて、居住空間としてではなく物資の収蔵を目的として作られたものと思われる。

⑬ 興文館東海林書店 国登録有形文化財
戦国時代増田城主・土肥家の家老を勤めていた旧家。秋田藩主佐竹氏のお宿となったことを示す木札が残っている。明治18年に書店を開業。増田地区には数少ない入母屋造り平入りの建物である。

⑭ 旧石平金物店 (観光物産センター蔵の駅) 市指定文化財
明治大正期に金物商などを営んだ石田家より横手市に寄贈され、現在「観光物産センター蔵の駅」として伝統的建造物の公開をはじめとする増田町の観光案内所兼物産販売所として運営されている。

⑮ 山中吉助商店 国登録有形文化財
居住部の小屋組が洋小屋組(トラス)、続く座敷と水屋そして蔵前は天井を張らない吹き抜けになっている。土蔵は典型的な意匠を示す座敷蔵。

⑯ 山吉肥料店 市指定文化財
増田の商家建築の特徴である家屋配置を良く残し、南側に配置された「とおり」が店舗より裏門まで一直線に伸びている。室内は明治大正期の建物に多用され、増田地域の特徴でもある一階の天井が高い造りで、北側となる座敷への採光が取れるように工夫されている。

⑰ 佐藤多三郎家 市指定文化財
明治以前から地織りの反物を商う太物商だったが廃業し先々代当主の三郎氏が医院を開業。現在の家屋は、閉院後に診療所と住居を解体し新築したものだが、蔵は明治後期の建築といわれる。「贅を凝らした蔵」が建築された初期のもので大変貴重な土蔵のひとつである。

⑱ 石直商店 国登録有形文化財
増田地域特有の間口が狭く奥行きが長大な短冊形で、他家と同様に店舗・座敷・住居・水屋・内蔵等が配置されていたが、内蔵は解体され、店舗と座敷及び居住部が現在も使用されている。

⑲ 日の丸醸造株式会社 国登録有形文化財
現在、増田で唯一の醸造元。蔵元だけで販売されている限定酒は見学者にも好評。増田の数多い内蔵の中において、その意匠や豪華で繊細な装飾がひととき目を引く内蔵である。

※公開している施設の前には「公開中」の看板が出されていますのでご確認ください。

観光案内所 (有料表示は入口)

- 公開家屋
- 公共施設
- 内蔵内見学可
- 内蔵有
- 飲食店
- おみやげ
- その他

※赤枠は要予約

昔の増田町のことを見たり聞いたり



最近増田を訪れる方々から「なぜこんな田舎にこのような町ができたのでしょうか」と問われることが良くあります。実は増田町史にも増田郷土史にも増田町の中心街区のことはあまり表現された文献はありません。私たちが明治生まれの年寄りたちから聞かされたこと、また私たちが見てきたもの、調べたものなどを思いつくキーワードごとに述べてみたいと思います。

当時の増田の繁栄した時代は、基本的に古代中世史まで遡るものではなく、明治大正昭和の近代史です。まず増田の人たちの気質の一面が記載された、次の『』の中の引用文書は(大正3年6月1日実業の増田第20号)を一部抜粋編集したものです。増田人の質実剛健な暮らしや地域創り、その生活の仕方、姿勢が端的に表現された短文と言えます。

『増田の人は主人と雇用人との間、一見見分けがつかないことがあり、初対面の人が主人を捉えて主人への取次を頼むことが往々にしてあった。これは古来増田の人の服装が、上下を通じて筒袖(つつそで)・股引(ももひき)を纏(まと)い、雇用人と共に労働するのが普通であったからである。これは成瀬・皆瀬両流域(俗に増田山内と呼ばれていた)の農民や樵夫(きりこ)と仲間として付き合い、久しい間にこれに同化してしまった、とも云われているが、要するに商人達と雖も(いえども)ひたすら質素に節儉を旨として生活してきたことに因る。またその住居は、表向きは粗末な茅屋で、従って家並みは商人町と云われ乍ら、そう立派でもなければ壮大でもない。しかし家の中に入れば内蔵が鎮座し、さらに裏に廻れば漆喰塗りの立派な土蔵が建ち並び、その意外さに世人は「増田の螢町」と称した。尻が光ると云う意である。この美風は、増田の社会の貧富の差を甚だしくせず、商人の数が当時雄勝全郡の数に匹敵しながら特に卓出せる地主などは存在しなかった。又、町内全域においても下層の者でも生計難を訴えることがなく、その多くが中産以下の相応の生計をしていたことにも現れている。』

増田人の特色としてこの新聞記事『増田人の風俗の特色』は、増田人の気質を端的に描写しています。商人の日常の生活は少なくとも明治の末ごろまではこのような状態であったと思われます。しかし、煙草の国営化、生糸の暴落による作離れなど、この地特有の産業も衰退に向かい、時代の変遷とともにこの美風も次第に色褪せ、一般の商人の態に変わってくるのです。また、貧富の差が甚だしくなく、下層の者の生活も相応の生計であったとするのは、当時極貧の生計に喘いでいた者の少なくなかった農山村の実態からすれば、増田はまだ恵まれた方であったことを述べていることのようにです。

地理：東北の秋田県南部の西栗駒山麓に位置し、成瀬川が皆瀬川に合流するところが増田です。旧街道では小安街道と手倉街道の交わることで宿場町としてではなく、物流の拠点として発展し商人の町が形成されたのが増田町です。

地形：増田町は標高100m前後であり、横手盆地南端東側に位置します。真人山から広がる扇状地は肥沃で水はけが良いため、安定した地盤とおいしい地下水により縄文時代から人が住み着いていたようです。現在その痕跡を垣間見ることができるのは吉野地区の『梨の木塚遺跡』に竪穴式住居が再現されています。

気象：夏は盆地独特のフェーン現象により非常に暑く、冬は2mほどの大変多い積雪があります。雪は増田に10件以上存在した魚屋が雪室に運んで行き、9月頃まで氷の代わりに使用していたそうです。自然のものを活用したという点で、今で言う「エコ社会」のひとつです。



土地：農地として好適地の横手盆地は陸地盆地としては日本一の広さを誇ります。昔から米作中心の地域ですが、増田が栄えたころは特殊農産物といえる葉タバコや養蚕がこの流域では行われていました。その仲買人は増田の商人です。今は傾斜地を活用した果樹栽培が増田町亀田から北は平鹿町醍醐や横手市大屋、南は稲川町大倉のあたりまで広がっています。りんごの無袋栽培はこの地区から始まり現在は全国的になっています。樹上で完熟させるために大変糖度の高いりんごが作られています。

政治：一国一城令により廃城となった土肥城跡は現在、増田小学校となっています。「増田」が国史に初めて現れたのは天平宝字(てんぴょうほうじ)3年(759)9月で、ここに出羽の郡衛(ぐんが)が置かれたと記載されています。この平鹿郡名の発祥地は増田町の小字名「平鹿」で、この地名の由来は成瀬川の河成段丘線崖にあったといわれています。平成17年に市町村合併しましたが、増田町は平鹿郡の筆頭町村でした。増田町本町を中心に役場、警察署、消防署、法務局、郵便局、営林署、更に県内の葉たばこ耕作面積を管理する専売公社などの諸官庁の所在することによって、周辺地域の中心でした。

教育：増田小学校は秋田県内で秋田市明德小学校の次に出来ています。現在の増田高校は大正の増田町立実科高等女学校を前身としています。また、旧西成瀬小学校では標準語教育を先駆けて行っていたことでも知られています。「文教の町増田」と言われた時代があるように教育熱心な地域でした。古くから東京の大学や学校に子弟を学ばせることもしていたようです。東京大学出や東北大学出のお医者さんやちょっとモダンな慶応や早稲田出身のお店のご主人がおりました。剣道関係者は山形県の米沢の学校だったり、商人の子弟の中には秋田商業古老のOBもおられました。秋田師範学校(現秋田大学)を卒業し、増田は教育関係の仕事に従事されていた方が多かったこともその成果かもしれません。また変わったところでは、北海道札幌市月寒にある財団法人月寒学院・学校法人八紘学院設立には増田の千田彦五郎と佐藤清十郎が私財をつぎ込み農業後継者育成の学校を作りました。もちろん今現在も存在する学校なのです。その理事長は稲川町出身の栗林氏でした。

文化：増田は産業や文化の面で北前舟の影響を受けた最も内陸のひとつです。内蔵の意匠などに関西風というか、上方の影響を受けたものが多く存在します。また、財力と人脈によりそれぞれの分野の専門家を招聘し、その当時日本の作庭家の第一人者の一人である長岡安平設計による真人公園は春の桜を観、秋には紅葉を楽しみ、その真人山を借景にした庭を造るなどして客人をもてなしていたといわれています。絵画、写真はもちろん、俳句や短歌、謡、能などを嗜む方多くおられたとのこと。北前舟の影響を受けた産業面では、昆布加工を行う昆布店が今も増田に存在しています。

産業：現在の北都銀行の前身である羽後銀行は増田が本店、さらにその前身たる増田銀行が明治28年(1895)5月3日「株式会社増田銀行」として全国的にも早い段階で増田の商人達により創設されました。それぞれの商人達による金貸業を貸すほうも借りるほうも「見える化」したことにより、さらに地域の経済活動に拍車がかかったと思われます。増田水力電気会社が真人発電所によって県南でいちばん早くこの町に電灯をともしたのです。その後、南は山形県境から北は阿仁町の辺りまで電気を供給する電気会社に拡大しました。増田町の中心街区の中町・七日町・本町には50軒ほどの商人がいましたが、お店の商売以外の収入も多かったものと考えられます。鉱山、山林経営、稲作、葉タバコ、養蚕、金融、証券、不動産と、増田が他地域と異なる発展を遂げることができたのは、そこに住む商人同士がライバルでありパートナーであったものと思われれます。1軒の家だけが繁栄するのではなく、異業種交流や共同協業、法人経営とマルチタスクに行われ、文字どおり産業・経済・文化の中心地であったと考えられます。質素節約を実践しながら暮らしてきた増田の商人は北前船の影響か、近江商人のように教育や社会福祉をはじめ地域のインフラ整備に力を注いできた時期があります。一軒の大きな地主が存在する地域と異なり、数十人の商人の広い人脈と財力と協業と知恵がこの地域を支えてきたものと思われれます。





祭り：増田町最大のイベントの「増田の花火」は秋田県内最古の花火大会として、現在も協賛者の方々の協力で毎年続いています。全国的に有名な大曲の花火より4年古いので2018年現在95回を数えています。増田月山神社祭典奉納花火が起源ですので毎年9月14日15日両日にわたり行われておりましたが、現在は宵宮祭りの14日夜に約5000発の花火が上がります。翌15日神輿渡御行列も古式ゆかしいものです。その増田月山神社のお神輿は昔京都から北前舟で運ばれてきた記録が残っています。冬に行われる「増田ぼんでん」は寛永20年(1643年)市場の神様である恵比寿堂を建立し、旧正月20日に五十集衆(イサバシユウ)「魚商」たちが商売繁盛を祈願し麻糸ぼんでんを奉納したのが始まりといわれています。春の「さくらまつり」や秋の「りんごまつり」が行われる真人公園は増田の東に位置し、朝日の昇る真人山の麓です。「さくらまつり」期間中に行われるメインイベントは「たらいごぎ競争」ですが、大正時代から続く息の長い祭りのひとつです。夏に行われている「たらいごぎ選手権」は30年ほどまえ「タライアスロン」としてその当時の若者がたらいごぎと自転車マラソンとはじめたのが元となっています。秋のりんご収穫時期に「りんごまつり」が行われるのも真人公園です。映画「そよかぜ」のロケも増田で行われました。沼館(雄物川)出身の佐々木康監督で1945年製作された映画の挿入歌と主演の並木路子さんは増田に深い縁があります。りんごまつりの「リンゴの唄コンクール」で審査員もされたことがあり、思いで深く今も歌い継がれています。



真人：町を東成瀬方面に抜けると間もなく、成瀬川にせり出した真人山があります。前九年の役で源頼義(みなもとのよりよし)にくみし安倍貞任(あべのさだとう)を討った、のちの鎮守府將軍清原真人武則(ちんじゅふしよづん きよはらのまとうたけのり)がここに居城していたのでその名が起ったといわれます。大正時代となりその当時日本の作庭家の第一人者である長岡安平設計による真人公園が大正改元を記念し公園化されました。桜の名所として知られ県観光三十景、『日本さくらの会さくら名所100選』にも選定されています。園内には義経・弁慶にまつわる『三貫桜』など伝説の史跡もありますが、名物としては毎年お花見に行なわれるたらいごぎ競争があります。昔、増田の商人は真人公園周辺に別荘を持っているお宅もあり、家族や友人知人客人などを誘って真人公園を散策や安らぎの場としていたと思われます。



交通：河川交通の時代を経て、増田は旧小安街道、旧手倉街道の合流拠点として物流や人材交流の陸路交通についても重要な役割をしてきたわけですが、大正時代から人力車も多く存在していたようです。その後、他に先駆けて増田乗合バス会社があったりしたようですが、十文字駅周辺は増田の人たちの所有地が多くありました。鉄道が下湯沢駅を過ぎ岩崎橋までの間に大カーブし増田に近づきますが、その線形は当時の増田の力を象徴しています。駅の西側には米倉庫、東側には木材土場と鉾山の鉾物置場があり、吉野鉾山からの索道が時折「ガラガラガラ、」と音を立てて鉾物を運んでいたこともすこし記憶にあります。当時秋田県内でも珍しい十文字駅から増田町までの道はコンクリート舗装道路だったそうです。道幅も幕末から今の道幅が確保されていたようで、物流の拠点としての増田町が発展してきたことがわかるもののひとつです。また、増田町は古くから岩手県水沢市(現奥州市)との交流が密接であり、悲願の水沢線開通を目指し十文字町や東成瀬村と連携しながら尽力された時代も長かったようです。新横手市となってから行政間は疎遠となっていますが、増田町の姉妹都市として水沢市は大事なパートナーでした。



娯楽：増田の商人たちは多角的に多方面の商売をしていた関係もあり、かなり裕福な暮らしもできたはずですが総じて質素節約を旨としていたようです。そのせいか自宅でも人寄せが出来るような家屋構造であり、大きな料亭などがなかったこと。勿論鉾山景気に沸いたこともあり、時代背景として遊郭など街各所に存在していたことが町割りの中にも垣間見ることができます。昭和に入ってからできた大きな映画館「昭和館」は木造の建築物でしたが、老朽化により取り壊され現在はその姿を見ることはできません。そのほか個人的には切手の収集家や写真や絵画の仲間、ジャズSPLレコードの収集家、謡や能の集まり、俳句会、囲碁将棋の仲間など商人同士や他地域の人々も交えた趣味・文化交流があったようです。



食：もともと横手盆地は湿地帯ですので稲作に恵まれたことで、米は主力農産物でした。増田町は南西斜面を活用した果樹栽培も秋田県では中心的役割を担ってきました。袋をかけない無袋栽培の先進技術も全国に先駆けてここから始まっています。現在は米どころでありながら、そばうどん、ラーメン、焼きそばなど麺類も美味しく増田周辺には多くのお店があります。昔はつり酒屋7軒、豆腐屋10軒ほど、魚屋10軒以上存在していました。ここ増田付近は海から遠く離れた雪の多い内陸ですが、日本海に面した本荘の港から2時間ほど離れた「魚尻線」ギリギリの内陸でした。冬の多い雪を大量に保存し9月ころまで使えるようにしていた「雪室」も増田町内には魚屋の数以上ありました。他に和菓子屋、パン製造会社や大きな味噌醸造会社もあり県内のみならず広範囲に供給していました。ここ増田には昔から豊かな食文化が静かに根付いていました。



©矢口高雄/横手市マンガ活用事業

人材：江戸時代の日本画家加瀬谷東嶺、昭和の洋画家水戸敬之助、釣りキチ三平の漫画家矢口高雄、植物学者工藤祐暉、映画監督石田民三、シドニー写真クラブ写真家石田喜兵衛、今も横浜港に停泊展示されている戦前の豪華客船・氷川丸船長石田忠吉など過去現在と各分野で活躍されている方がそのほかにも多数おられます。商人の町でしたので、名もない人のつながりを非常に大事にしたおかげで小さな田舎町が繁栄できた元と考えられています。ただ、今も昔も優秀な人材を育てれば、その地域から出て行ってしまう現状は変わりませんが、人のつながりを大事にしていきたいものです。



暮らし：増田には昔『出張料理人』が多くおり、それぞれのお宅に出かけてお料理を出していたようです。魚屋や豆腐屋、蕎麦屋、餅屋など食材供給業者がいろいろ多く存在し、どの家も座敷の真ん中の柱を外すと大広間になるような構造なのです。そのお膳や漆器など食器類は温度や湿度が一定の内蔵2階に所蔵されていました。日常は比較的質素な暮らしでしたが、冠婚葬祭などは自宅で行っていたということです。暮らしの中に根付いていた信仰は月の神様『増田月山神社』、太陽の神様『神明神社』、曹洞宗『増田山満福寺』、浄土真宗大谷派『東流山通覚寺』のほかお堂や石碑が祭られています。



内蔵：文化庁が重要伝統的建造物群保存地区指定のポイントは増田町が幕末から変わっていない町割りや道路や敷地です。特徴的な『秋田・増田の内蔵』がメインではないのです。増田町中心部に現存する商人の家は約50軒弱ですが、明治大正昭和初期と所有者が変わらずにいるお宅は10軒ほどです。所有者が変わっても内蔵を含む建物と敷地はそのまま残っています。間口が12~15mくらいで奥行き100~110mほどの短冊状の敷地が基準となっています。その敷地内には母屋の中に内蔵、さらに裏庭に外蔵がそれぞれ存在します。

福祉：増田の朝市通り裏にある「感恩講」という木造洋館は昔の社会福祉事業団体の事務所です。増田の商人を中心に貧民救済事業として食料やお金を出し合い、生活の苦しい方々に配分支給していた組織です。佐竹の殿様が秋田の豪商那波氏に民間レベルでの貧民救済を命じ、那波氏親戚を中心に広がり親戚のいる増田も早くからこの事業に取り組んだようです。増田が他地域に比べ全体的に比較的豊かであったことを物語るもののひとつです。





秋田増田の内蔵がある通りを散策し町並み案内所「ほたる」から750m増田まんが美術館まで足を延ばすと矢口高雄の釣りキチ三平にも会える

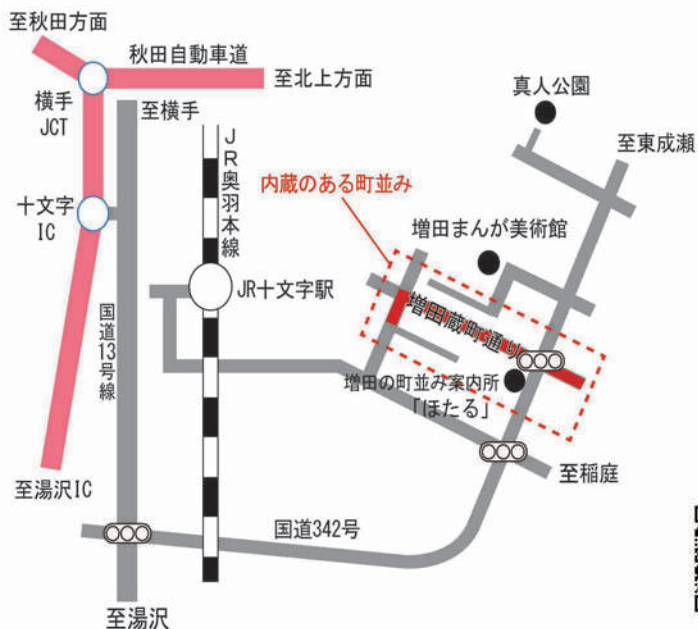
©矢口高雄/横手市マンガ活用事業

増田へのアクセス

- ・羽田から秋田まで約1時間
- ・秋田空港から約1時間30分
- ・大曲駅から十文字駅(JR奥羽本線 最短32分)
- ・十文字駅からバス約10分

ACCESS to MASUDA

- ・Akita Airport About 1 hour From Haneda Airport.
- ・About 1 hour 30 minutes from Akita Airport.
- ・From Omagari station to Jumonji station JR Line.(Minimum journey time,32 minutes)
- ・About 10 minutes by bus from Jumonji Station.



Railway Access Map



Masuda Town Tourist Agency

増田細見読本

秋田増田の内蔵「昔の増田のこと見たり聞いたり」

平成31年2月25日 第一刷発行
 令和元年5月29日 第二刷発行
 令和元年7月15日 第三刷発行
 令和2年2月25日 第四刷発行
 令和3年1月25日 第五刷発行

発行所 一般社団法人増田町観光協会
 〒019-0701 秋田県横手市増田町
 TEL. 0182-45-5541

増田のこと対談
 Youtubeサイト

